

79. ガザの深刻化

茶の間のテレビで現実の戦争を見るのが、残念ながら日常化してしまった。ミサイルの発射と着弾、破壊されるビル群、逃げ惑い泣き叫び負傷した人々、ぼかさされた死体等々の中継や録画映像は、命を落とす瞬間までを想像させる。やり切れない理不尽さを感じても、日常化によりその感度は確実に鈍くなっている。輪を掛けて問題なのは情報戦であり、陰謀に基づく真偽不明の情報は一層の混乱をもたらす。人類は増々戦争や紛争を解決できないでいる。

パレスチナ情勢が深刻さを増している。歴史的な因縁と、繰り返す戦いによる互いの怨念は際限がないよう思える。イスラエルはユダヤ人が 1948 年に建国した国。ユダヤ人は 2,000 年の間、迫害を受けてきた悲しい歴史がある。特にナチスドイツによるホロコーストは悲惨だ。一方でイスラエルの建国によりパレスチナの人々が追われたという事実がある。それに宗教・民族が絡んでガザ地区などのパレスチナ問題は複雑だ。四次の中東戦争を経て、1993 年にパレスチナ国家とイスラエルが共存を目指し西岸とガザにパレスチナ自治区ができたが（オスロ合意）、その後も武力衝突が続いている。ガザは古代からアフリカとアジアをつなぐ交易の中継地だが 1967 年の第三次中東戦争でイスラエルが占領、05 年に放棄するが周囲を封鎖し出入りを制限。06 年のパレスチナ自治政府の選挙で PLO からハマスが多数派となるとイスラエルはガザの封鎖を強化。種子島ほどの面積に 200 万人以上が住む。そこは壁に囲まれ「天井のない監獄」といわれる。

イスラム組織ハマスがイスラエルを攻撃したのは 10 月 7 日。1,000 人の戦闘員がイスラエルに進入し、1,000 人以上を殺害、240 人以上が人質に捕らわれた。今回の攻撃自体は従来の姿勢の継続であるとする一方、イスラエルがサウジアラビアと国交正常化交渉を進めているため、つまりイスラエルに有利な中東情勢が広がるのを避けるためだったと説明する記事もある。

イスラエルは激しく反撃し、当初は双方の死者が 1,200 人位の発表だった。バイデン米大統領や EU 諸国は強くイスラエル支援を表明していた。特にユダヤ系の影響力が強い米国は手厚い支援をしている。イスラエルのネタニヤフ首相は「ハマス壊滅」を何回も標榜していた。

イスラエルの容赦の無い攻撃でガザ当局発表の死者は激増しているが、イスラエル側の被害は 1,400 人程を保っているのは、軍事力（攻撃力）の差を意味している。ハマス壊滅作戦で、ガザ北部のパレスチナ人を半ば強制的に南部に移動させようとしながらも攻撃は止めず、人質救出を言いながらも攻撃を止めない。イスラエルはやり過ぎだと思っていたら、10 月下旬頃から明らかに風向きが変わってきた。人道危機から多くの国がイスラエルの強すぎる反撃を非難し始めた。バイデン大統領の発言も言い方が変化したのを感じたが、国連の休戦決議に米国は棄権までいくのが精一杯のようであった。10 月 27 日の国連総会は休戦決議案を賛成 121 カ国で採択したものの、米国やイスラエルは反対し、日本は驚くことに棄権した。そして 11 月 15 日の国連安保理(15 カ国)で戦闘休止要請を賛成 12(日本含む)で採択したが米英口は棄権だったのだ。

国連の休戦決議を無視するかのようにイスラエルは、ガザ北部のみならず強制移動させた南部にさえ攻撃の姿勢を示す。パレスチナ人民は逃げ場を失う。ガザ当局は 13 日、死者 11,240 人、3,500 人が行方不明と発表。犠牲者はさらに増え、怨念はさらに増す。「目には目を歯には歯を」という言葉は復讐を煽るのではなく、「復讐はしすぎるな」という抑止の言葉だったという。復讐のしすぎは侵攻に結びつき、怨念は断ち切れない。

国連の機能不全が言われる。決議もできない、決議しても何も変わらない。だが国連憲章は人類の最後の砦ではないのか。もっと法の支配を政府は声高に言わねばならない。それにロシアのウクライナ侵攻を「国際人道法違反」と言ったのだから、イスラエルの過剰な反撃と侵攻を批判すべきではないか。二重基準は避けなければならないのではないか。 (2023 年 11 月 21 日)